癒しの天使とラブビート　2

浦賀狭霧

No.10　恋は劇薬なり

人間の恋愛というのは、どうしてこうも繊細微妙で、もどかしいのだろうか。世間の色恋事情に耳を傾ければ、「誰某とお付き合いしたい」と桃色吐息を吐き出す大人や、縁結びのおまじないをして、健気にも遊園地デートを夢見る少年少女がいると聞く。他人に好意を感じた瞬間に「好きです」と伝えられれば、どれほどの人類が救われるだろうか。

文学では平安から現代にいたるまで、数多くの物語が語り継がれ、記録され、星の数ほどある。愛を語らうラブロマンスや、色恋沙汰が刃傷沙汰になったりする火曜サスペンス、この紙面には書けないようなことに発展する場合もある。

もはや古今東西、老若男女を問わず、恋愛は人類固有の能力でないかと考えたりする。

また、その裏では古今東西の老若男女が海原に匹敵するほどの大粒の涙を流したという。恋愛がもたらす幸福を賛美する一方で、恋愛がもたらす悲劇を忘れてはならない。

かく言う僕も恋愛に苦い思い出がある。初恋相手が彼氏持ち、距離感を誤って気まずくなる、褒めたら嫌な顔をされるなど。

それがいい経験だったかどうかは分からない。その思い出が、良薬は口に苦しどころか、ただの不味い毒でしかなかったと考えることもある。でもまた懲りずにしてしまったのだ。

恋愛は薬にも毒にもなる。そして美味しいか不味いかは味わうまで分からない。というのが僕の考える未熟な恋愛観であり、恋愛の不確実性を表す悩みの言葉である。

稲敷小雪は、僕が大学二年生になって間もないころに知り合った。同じキャンパスの一つ下の後輩である。電車で大学に向かう際、同じ時刻の同じ車両に乗ってくる。小柄だが背筋がいいため、どんな人間よりも背が高いように感じられる。穏やかな表情の中に凛々しい目つき、

堂々とした姿勢、言葉では説明しづらいが惹かれるものがある。電車内で言葉を交わすことはないが、出会ったら会釈するくらいの関係を築いている。

ある日の昼休み、構内を歩いていると偶然彼女に出会った。

「こんにちは、毎朝一緒の電車にいる人ですよね」

優しさと冷静さが混じり合ったような声音だった。外見から毎朝電車で会う彼女であるとわかったが、いつもは見られなかった彼女の朗らかな表情が僕の心を強く引き付けた。

「ああ、どうも。こんにちは」

どうにも緊張してしまう。この笑顔を見せられてどうも落ち着かいない。彼女は距離感の間合いを探るようにそっと囁いた。

「自己紹介でもしますか？　お互い、お名前を知りませんし」

彼女は咳払いをして、こちらも目を真っ直ぐに見つめた。

「一年生の稲敷小雪と申します」

「ええと、初めまして。二年生の浦賀カスミです」

「初めましてじゃないでしょう。もう一か月ほどになります」

いたずらに、純粋に、朗らかにクスクスと笑う彼女に更に心をつかまれてしまった。

「浦賀さんは先輩だったんですね」

名前を呼ばれただけで、なぜこれほどまでに胸が高揚する。

「では、昼休みも長くありませんし、ここで失礼しますね」

彼女は姿勢を正して、深々と礼をした。

「これからもよろしくお願いしますね。浦賀さん」

そして僕の横を通り過ぎた。遠ざかっていく彼女の後姿を見送った。昼休みの数分の出来事だった。今はこの感情が何に起因するかはわからなかった。ただ瞼に焼き付く彼女の笑顔だけが強烈な思い出となった。

No.11　Who am I？

大体の人間は自己紹介というと、自分の名前と共に自分が所属している集団の名称を口にする。集団というのは例えば、出身、学校名、会社などが挙げられる。無意識のうちにやっていることだが、僕はそこが気になる。自己開示において所属というものがそれほど重要なものなのか。

その人の正体を知るとき、どれほどの情報があれば納得するのだろうか。外見と名前だけでは、結局あなたは誰なんですかという疑問が拭えない。そこに所属機関、身分、職業、役割などが付け加わると妙な納得感がある。ある人がどんな人かを知るということは、その人が社会においてどんな役割を果たすのかを知ることと同義なのかもしれない。

自分が何者なのか分からないと不安になる。思春期のトンネルをくぐる中でそのような悩みに出会った。その悩みにはかなり苦労した記憶がある。ドラマなどで、記憶喪失の人間が自分は何者なのかという苦悩を抱えるという心情が描かれる。自分が誰なのか分からないという、その苦悩の気持ちが少しわかるような気がする。人間社会において、自分の役割が分からないというのは不安や孤独を感じさせる。

人間は役割を求めたがる生き物なのかもしれない。僕はそのような仮説を思い浮かべた。これはただの経験論であり、立証や反証の方法は思いつかない。しかし、僕はこの仮説が、もしかしたら当たっているのではないかと心のどこかで思っていたりする。

人間という社会的動物は、組織の中で役割を求めたがる。自分自身の社会的定義がないと不安に駆られる。

社会的な役割を果たすことで、人間が個性や人格などの主体性を得られるのではないか。そう考えずにはいられない。

そんなことを、お風呂に入っているときに思いついたのだ。

No.12　不形(ぶなり)なおしゃべり

午後の講義が終了し、高萩夏彦と合流して帰ることになった。春が近づくにつれ日没が遅くなっているので、まだ外が明るい。

「一日、お疲れさま」

「おつカレーライス」

「……」

「なんだよ。お疲れサマーバケーションのほうがよかったか？」

疲れた日の帰り道というのは、なぜだか口数が少なくなってしまう。そんなことはお構いなしに夏彦はいろいろな話をする。彼の無尽蔵な体力に感心する他ない。

「どうしたん、黙っちゃて」

「んん、何話していいかわからない」

「じゃあさ、クソリプ会話選手権やろうぜ」

「なんだそれ。まあ、名前から想像できそうだけど」

「誰も幸せにならないし、めちゃくちゃ不毛な地獄みたいな遊戯だよ」

「絶対にやりたくない」

「じゃあ、良リプ会話選手権ならいいだろ」

「それならいいよ。よくわかんないけど」

「なら、なんか話題ふって」

「んー、そういえばこの前、本屋に行ったんだけど」

「カスミ、可愛いよ」

「そこでいい本みつけちゃってさ」

「その服似合ってるね」

「会話になってないんだよ」

「でも幸せな気分になるでしょ」

「なるけどさ。なんなんだよこれ」

『良リプといえるのか怪しい。会話になってない。選手権とは？』という言葉が頭に浮かんだ。そんなことを聞きたい気持ちになったが、言ったら多分彼は

「細かいことは気にするな。もっと本質を観ようぜ」

と笑いながら答えるのだろう。この言葉は常々彼が愛用している。彼の大雑把さを表すようでありながら、本質

を見失ってはいけないという警告のようにも感じられた。

「そういえば京助は？」
「俺らみたいに暇じゃないんだろうね。昨日の夜、長い間考え事してたら、課題が終わらなくて自習室にこもってるんだとさ」
「夏彦は大丈夫なの？」
「何が？」
「課題とか先延ばしにしそうだし」
「よくわかったな。正解だ」
夏彦は自慢げに答えた。
「でも俺は課題とか試験とかの事は、ちゃんと計算してるから」
テスト前に泣く夏彦の姿が思い浮かんだ。今年もテスト前に呼び出されるのだろうか。
そんなことを考えているうちに夏彦の家が見えてきた。
「そんじゃな」
「また明日ね」
読者へのメッセージも、オチもない。それが高萩夏彦との会話なのである。

No.13　淘汰と発明

「人工知能というのが、巷ではやっているらしいではないか」
月居京助が昼休みに話しかけてきた。
「巷どころか世界中で流行ってるんだけど」
「私はこの話を聞いとき、二〇世紀の画家とカメラの関係に似ていると考えたのだよ。興味があるなら詳しく話そう」
どんな話になるのか想像できないが、とりあえず話を聞いてみることにした。
「時はさかのぼること中世ヨーロッパ。このころ画家という職業は、権力者や資本家から風景画や宗教画を描いてほしいという依頼を受けて、注文通りに絵を描くこと

を生業としていた。そこで重要になるのが、その絵画がどれだけ写実的で、美しい風景を正確に描写できるかどうか。当時の画家は、どれだけ目に見える世界を写実的に表現できるかを追求していた。しかし、二〇世紀にその役目も、ある発明によって代わられてしまった。それがカメラである。風景を百パーセント正確に写し取ることができるカメラの存在は、当時の画家たちの存在意義に亀裂を入れることになった。撮影には特別な技術も必要なく、早く正確に風景を切り取れる。そこで当時の芸術家たちは考えた。カメラが我々以上の技術を持っているなら、我々は何のために絵を描くのだろうと。アートの意義が根本から覆された。その状況に対して、アーティストにできることは何か、という問いを追求し続けた。ある画家は、目に映るとおりに世界を描かない、という答えの一つを絵画で表現したのだ。写実的という言葉からかけ離れた、現実離れした絵画。カメラでは決して描くことのできない何かをキャンバスで表現する。これは今までになかった革新的なアイデアだった。しかし、当時は簡単にその絵画は受け入れられずに酷評されてしまった。まあ、今となっては世界中で認められてはいるが」

彼はカバンから緑茶のペットボトルを取り出し、のどを潤した。

「今の状況と似ているのではないか。人工知能に仕事を奪われる、と騒がれている現状に酷似しているのではないだろうか」

予想外の話に、僕はうなずくしかなかった。彼はニヤリと笑い、話をつづけた。

「人間が知的生命体であり、社会的動物である以上、自然淘汰より社会淘汰のほうが優勢なのは避けられない。歴史を見れば、発明が良くも悪くも、人間社会を大きく変化させるという事態は繰り返されている。おそらくこれからも繰り返すのだろう」

彼はもう一度、緑茶を口に含んだ。

「話は終わりである。この話をどうとらえるかは聞き手に委ねることにしているのだ」

様々な情報が頭の中を飛び交っている。おそらく、次の講義に関する記憶のキャパシティーがもう残り少な

い。
「考えておくことにするよ」
僕はそれだけ言って、意味もなく目を閉じた。
「君の答えが楽しみだな」

No.14　雨と小雪と霞たち

　じめっとした空気が頬にまとわりつく日だった。昼に一度止んだ雨が、大学から帰ろうとした時間に再び降りだした。僕は檸檬色の折り畳み傘を片手に、靴を濡らさないよう水たまりを避けていった。それでもうっかり水たまりを踏んでスニーカーを濡らすことがある。布製の靴から水分がジワリと広がり、やがて靴下を濡らす。どうにも濡れた靴下の感触は好きになれない。
　できる限り早く帰宅しようと思っていた。リュックの中の機械類が、万が一にも水分で故障しようものなら、僕はテルテル坊主を片手に雨雲を恨む日々を送るかもしれない。
　子供のころは長靴で水たまりを踏み散らし、濡れた畑の匂いを嗅ぎながら、楽しく家へ帰った記憶がある。でもいつしか、雨が好きではなくなってしまった。
　過去のことを懐かしみながら歩いていると、見慣れた人影があった。建物の屋根の下で困った顔をしながら、空を見上げている。その人影の名は、稲敷小雪である。僕は彼女に近づいてみると、向こうもこちらに気が付いた。
「浦賀さん、お帰りですか」
「そうだけど、なんか困りごと？」
　彼女は力なく笑った後、呟くように言った。
「天気予報聞いてたはずなのに、ついうっかりと」
　両手に何も持っていないことをアピールしている。どうやら傘がないらしい。さらにため息交じりで呟いた。
「このくらいだったらコンビニまでダッシュして、ビニ傘を買うのもいいんですが」
　しばしの沈黙の後、稲敷小雪が僕の傘をまじまじと見て言った。
「そうだ、その傘に入れてください」
　まさか彼女からそれを言うとは思わなかった。

「僕はいいけど。でも大丈夫？　その状況を誰かに見られて困るとか」
「大丈夫ですよ。浦賀さんが心配することじゃありません」
　それを聞いて僕は少し安心した。
「とりあえずバス停まで一緒に行きましょうか」

　水たまりを避けつつ、しばらく歩いていると、彼女が話しかけてきた。
「アイアイ傘って字面からしてロマンティックですよね」
「字面？　ロマンティック？　相合傘のどこが……」
　しばし思考を巡らせて、一つの考えに至った。
「まさか、アイアイ傘の漢字を、愛々傘と勘違いしてるオチじゃないよね」
「えっ、愛々傘じゃないんですか」
「正しくは相合傘なの」
「ちぇ！　つまんないです」

　彼女は頬を膨らませて文句を言った。その様子がどこか微笑ましかった。

　話題は変わって、雨の日の苦労の話になった。
「私、雨の日は髪の毛がゴワゴワしてなんか嫌なんです」
「髪の毛か……」
　僕は髪の毛を短くしているので、あまり影響を感じたことはないが、彼女は肩から垂れ下がるほどの黒い髪を持っている。
「いろいろと対策をしてるんですが、これといった決め手がないんですよ」
「何かと大変ですね」
「まあ、女は髪の命という言葉もありますし、手入れは怠れないんですが」
「逆だよ逆」
　それだと頭髪が女性の肉体を依代とする寄生生物みたいじゃないか。
「やっぱり気づきました？」
「わざとなのか」

「浦賀さんを試してみました」
何を試したのか、なぜ試したのか。聞きたいことはあるけれど、彼女の笑顔の前ではそんな気持ちも起こらない。どうにも彼女の前では気が抜けない。いろいろな意味で。
その後、電車に乗ってから降りるまで、様々な言葉を交わした。そして、改札で別れることになった。
「傘を貸してくれて、本当にありがとうございます」
「いいよ、そんなこと気にしないで」
「また明日会いましょうね」
「うん、じゃあね」
また明日という言葉がうれしかった。彼女は明日、僕と会えることを信じている。そう考えると自然と勇気のようなものが湧いてくる。『たまには雨の日も悪くないな』と思いながら僕は帰路を辿った。